

修道中学校

入試科目		算数	国語	理科	社会	C T	総合
試験時間		50分	50分	40分	40分	50分	
配点		125点	125点	100点	100点	100点	550点
受験者平均点		82.1点	63.6点	69.0点	60.6点	75.7点	350.9点
合格の目安	得点	82点	62点	68点	60点	74点	346点
	(%)	65.6%	49.6%	68.0%	60.0%	74.0%	64.4%
昨年度との比較		やや易化	難化	やや易化	やや難化	横ばい	やや難化

算 数

1	計算と小問集合	(1)①計算の工夫 ②部分分数分解 ③小数・分数の計算 ④単位の変換 (2) 差集め算 (3) 仕事算 (4) 平均点 (5)円を利用した平面図形の角度 (6) 相当算
2	小問集合	(1)割合を利用したグラフの作図 (2) 立方体の展開図 (3) 会話文の文意の読み取り (4) 立体図形の見取り図
3	円周率の考え方	(1) 語句説明 (2) 同じ面積の図形を探す問題
4	速さに関する問題	小問数：4
5	対話話文（時計算）	小問数：5

今年度の受験者平均点は、82.1点、およそ65%となっています。平均点からみると、受験生にとっては解きやすかったといえるでしょう。

問題全体をみると、例年では小問集合は大問1題のみの出題ですが、今年度は1、2ともに小問集合という変化が見受けられました。1は受験生にとって見覚えのある易しめの一行題で、基礎的な知識の習熟度を

測れる大問となっています。対して2は立体感覚や、文章の読み取りなど、思考力を重視した大問となっています。

1(1)で計算問題が4問出題されています。うち2問が計算の工夫、1問が単位に関する問題です。残る1問の計算も例年に比べると易しく

なっています。計算力を問う、というよりも積み重ねてきた勉強量（計算の工夫の仕方を知っていますか、単位を正確に知っていますか）を問うような構成となっています。

（2）以降は小問集合です。**2**と異なり、テキストで頻出といえる、非常にオーソドックスな問題が多く出題されていました。（2）～（5）は受験生なら見覚えのある問題ばかりなので、苦戦することはないでしょう。（6）は難易度の高い相当算です。式の途中で $(2+360) \times 3 - 490$ という計算を行う必要があります、○を使った分配法則計算に慣れておく必要があります。ですが、慣れている受験生は多くなかったでしょう。

2はあまり受験生にとっては、見覚えのない小問集合です。（1）は水量の変化をグラフに表す問題です。水が入る部分の底面積と、かかる時間が反比例になることを理解した上で、順を追って考える丁寧さが求められています。（2）は最短距離を、立方体の展開図に書き入れる問題です。別々に考えれば、どちらも受験生にとっては馴染みのある問題なので、知識の結びつけが出来るかどうかは問われました。（3）は規則性です。自分で規則を見つける問題ではなく、A君、B君、C君の発言から、各人がどういう考え方で規則を見つけたかを読み取る問題です。

（4）は立体図形の見取り図に関する問題です。知識ではなく、立体感覚を問われています。どの問題も、設定を読み取り、しっかりその場で考えることを要求している大問になりました。

3は円周率に関するユニークな問題で、（1）は「円周率とはなにか」を記述させる問題です。普段なんとなく使っているものを、しっかりと表現する能力が問われています。（2）は円の面積と、同じ面積の図形を選択させる問題ですが、円周率を3としているため、混乱せずに落ち着いて解く必要があります。

4は速さに関する問題です。（1）から（4）へと順に難しくなっていく王道タイプの大問です。（1）は速さの3公式を使うだけの基本問題、（2）は速さにつるかめ算を加えた、よくある問題です。（3）以降

に条件文が追加されます。純粋な速さに関する条件（時間、距離、速さ）ではなく、時速とガソリン消費量に関する条件が追加されます。（3）は割合に関する問題ですが、ここで躓いた受験生の多くは、割合に関する問題だと認識できていなかったのではないかと思います。追加された条件をきちんと読めるかどうか、この問題のポイントだったといえるでしょう。（4）も（3）と同様に読解力を問われています。（2）がヒントになることに気づけばそこまで難易度は高くないですが、読解力的に息切れし、条件整理を仕切れなかった受験生が多いのではないのでしょうか。

5が今年度入試の一番の目玉でしょう。近年、読解力を測るための対話文形式や、長い文章題というのは、市内入試で散見されてきました。それらとは一線を画す分量と難易度の、時計算を題材にした対話文形式の大問です。B4の問題用紙を丸々1枚分、対話文に使っています。いわゆる受験算数という時計算の理解が最低限必要な知識、考え方となります。その上で、その時計算の考え方を応用するだけの応用力に加え、長い文章中から必要な条件を読み取るだけの読解力が、正答するためには必要とされます。なんとなく典型的な時計算は解けます、という程度の受験生では歯が立たないでしょう。とてもハードルの高い大問だったと思います。

学校説明会で前もって言われていたとおり、分量が大幅に増えていきます。大学入試改革を踏まえた上で読解力、表現力を重視したいという修道中学校の思惑の表れだと思います。とはいえ、合格の目安となる受験者平均点（82.1点）に到達するためには、新傾向に注目する必要はありません。従来の受験算数を暗記に頼ることなく、しっかりと理解しながら進めていくことが1番の近道だと考えます。いわゆる公式といわれているものを自分で説明できるくらいまで理解できているか、難しめの問題を粘り強く考えた経験をどれくらい積んでいるかが重要になります。

国 語

- | | | | | |
|---|------------------------|-----------------------|-----------|--|
| 一 | 漢字の書き取り・読み取り | | | |
| 二 | 小島俊明『ひとりで、考える 哲学する習慣を』 | (説明文 約 2800 字 小問数 7 問 | うち記述 5 問) | |
| 三 | 八重野統摩『ペンギンは空を見上げる』 | (物語文 約 3000 字 小問数 7 問 | うち記述 2 問) | |

説明文、物語文、漢字語句の出題という大きな形式に変化はありませんが、3年連続で大問構成に変化があります。2018年は、漢字と語句の大問が独立した大問3題構成。2019年は、漢字の書き取りと読み取りがそれぞれ別の大問と出題され、大問4題構成となりました。今年は、漢字と書き取りが一つの大問となり、それに説明文と物語文の大問が加わり、大問3題構成に戻っています。

また、ここ3年、文章の内容や条件をふまえて書くという形式ではあるものの、「自由作文」に近い形の出題が続いています。2018年には、説明文と物語文の両方の内容を踏まえて書く作文、2019年は自分で四つあげた「修道中学校語彙」を用いて書く作文でした。今年は、ある人が外国を旅した経験を活かして、日本を旅する外国人に声をかけたが、ある人が活かすことのできた外国旅行での経験はどのようなものかを考えて書く問題でした。文章の内容をまとめる形だけではなく、文章の内容や条件に沿いながら、自分の考えをまとめる力をみる出題です。

では、大問ごとに詳しく見ていきましょう。大問1の漢字の書き取り、読み取りでは、難しい出題はありませんが、「訪問（「問」を「門」）」「運賃（「賃」を「貸」）」などの書き間違いをしないように、また「河口」は同音異義語の「加工」にしないように注意が必要です。「樹立」は言葉を知らずに解答できない可能性があるという意味でやや難しかったといえるでしょう。ただし、いずれも基本から標準レベルの問題です。

大問2の説明文は、『ひとりで、考える 哲学の習慣を』からの出題でした。中学入試に頻出の「岩波ジュニア新書」の一冊で、2020年の教

育改革を見据えて、「考える」とはどういうことかというテーマでまとめられたものです。出題されたのは「想像力」について説明された部分です。前半では落語「井戸の茶碗」を例としてあげながら「人情の機微の美しさ」が「想像力」に支えられていること、そして後半では「日常生活」の中での「想像力」の大切さについて述べ、「やさしさ」や「思いやり」などはすべて「想像力」が土台にあるという形でまとめられます。古めかしい言葉、なじみのないストーリー、そしてそれぞれの登場人物の視点になりながら「人情の機微」読み取らせる問題、前半の「落語」の部分の読解は、小学六年生にとって難しいものだったでしょう。問一は「所作」という語を完成させる問題で、日常的には使わない言葉なのでややレベルが高いものです。問二も語彙についてで、「まがったこと」の説明。「道理にはずれたこと」「正しくないこと」などと書けばいいのですが、一言で答えないといけなかったので少し難しかったかもしれません。問三は、「相手を思いやる豊かな想像力」を読み取れる二人の登場人物の行動について説明する記述で、難易度は高かったでしょう。問四は、「みがくのはよそう。また小判が出るといけない」という「落ち」にあたる言葉について、誰のセリフかということと、小判が出たことを「良い」ではなく「いけない」ととらえたのはなぜかということ、それぞれ解答する問題。後者には「筆者の『人情の機微の美しさ』というとらえ方にもとづいて」という条件がついており、小判が出ることによってどのような想像力が働き、そしてそれが「いけない」理由につながるのか説明する問題で、非常に難問です。問五は、最初にも書いた「作文」に近い、五十字でまとめる問題でした。

大問三の物語文は、坪田譲治文学賞を受賞した『ペンギンは空を見上げる』です。宇宙ロケットの技術者になる夢を抱いた小学六年生の「ハル」が主人公の物語で、母親は心のどこかで自分のこと憎んでいると感じてきたが、実は「ハル」自身の歪んだ見方がそのように感じさせていたことに気づかされる場面からの出題です。自己中心的な視点で物事をとらえていた少年が他者の視点に気付かされるという少年の成長・自立の物語で、修道中で出題される典型例といえる内容です。

問一は、慣用句で「かぶりをふる」「二の句がつけなくなる」を完成させる問題で、やや難しく感じられたでしょう。問二は理由のぬき出しで、これは易しいものでした。問三は、60字の記述と、ぬき出しです。転校してきた「イリス」と親に対する歪んだ見方の共通点を解答する問題で、「自分の幼稚さを分厚いレンズにして…自分の都合の良いように

屈折させてしまっていた」という比喻表現を正しくとらえられたかどうかポイントになります。問四は、ハルは母親の本当の気持ちに気付きながらも涙を流すことしかできなかった理由を説明する80字の記述で、直前をまとめれば解答が作れるので部分点は確実に取れます。問五は「表現の特徴」の記号選択問題。「適当でないもの」を選択する点に要注意です。

今年も、「しっかり書ける」ことが求められる、記述問題が主体の出題でした。これら記述問題を空欄にせず、しっかり書くというのが前提ですが、一方で、漢字や語句でいかに得点できたか、また、数少ない記号選択や抜き出しを取りこぼさずに得点できたか、実はこのあたりが合否のラインを分けているのかもしれない。

理 科

- 1 化学分野から、中和と気体の発生 に関する問題（小問7）
- 2 生物分野から、ヒトのからだと鳥の肺のつくり に関する問題（小問12）
- 3 地学分野から、川のはたらき・降水量と水位のデータ に関する問題（小問8）
- 4 物理分野から、（A）ふり子 （B）電流回路 に関する問題（小問9）

今年も物理・化学・生物・地学の4分野から1題ずつの大問4題の構成です。そして、それぞれの単元の典型的な問題が中心で受験生の単元の理解度がしっかり試されたと思います。また、その中にも実験・観察のデータを分析して対応する問題やその場で与えられた情報をもとに考える問題を入れることで思考力をはかることも忘れてはいません。

1 中和と気体の発生についての問題

塩酸と水酸化ナトリウム水溶液の中和と塩酸とアルミニウムの反応

から発生する水素の量を計算させる、まさに典型的な問題です。演習を重ねてきた受験生にとっては自信をもって取り組むことができたはずです。逆に、ここでつまづいてしまった受験生は不安をもったまま次の問題に進んでしまったと思います。メンタル面で自信を獲得出来たのか、不安に陥ったのか、大げさに言えば、今年の理科の入試を左右した一題になったかもしれません。

2 ヒトのからだから、呼吸・消化・血液循環についての問題

問1～問3は基本事項の確認レベルの空所補充の問題で全問正解が求められます。ただ、問2の「ご飯をかんであまく感じるのは、ご飯の中の何が消化されたためですか。」という問いを早合点するか、思い込みで読んでしまうと、あまくのキーワードに誘われて「糖」と答えた受験生が少なからずいたと思います。そして、作問者の狙いもそこにあったはずです。問4の(1)(2)は、基本内容ですが、選択肢が多く、迷いやすい言い回しや表現が多く、しかも、すべて選びなさいの形式なので、焦りも手伝って、ミスが誘発されたはずです。一変して、(3)(4)は受験の知識はいらないその場で与えられた条件や示された図から考えを巡らせる問題で、受験生の観察力や思考力が問われたと思います。特に(4)の与えられた鳥の肺の図から血液の流れの意味を考えさせる記述は良い問題です。しかし、時間をかけて出来なかったが一番困るので、思いっかなければ後回しにする早い決断も必要です。

3 川のはたらきについての問題

問1の基本事項の確認レベルの空所補充は、全問正解が必要です。問

2の川の水位が上がる原因を大雨以外で記述する問題は、近年、毎年のように起こっている自然災害に関心をもっていれば、ニュースなどでその知識が解答の手助けになったかもしれません。問3は川の上流の降水量と下流の水位の相関を多くのデータから探し、読み取る難問で、後回しにすべき問題です。

4 (A)がふり子、(B)が電流回路のともに定番中の定番の内容で、ミスをしてはいけない問題です。自信をもって解くことができ、気持ちよく試験終了を迎えることができたと思います。もちろん、しっかり演習を重ねて、準備万端で臨んだ受験生であることが前提です。

対策としては、簡単ではない計算問題に対応できる計算力、長い問題文を読みきる読解力、表や図を正確に読み取る分析力が必要となります。総合的な演習を通して、しっかり力をつけておきましょう。また、同学校の入試説明会の情報にも注意しましょう。

社 会

1 《地理》都道府県の気温と降水量、産業、防災関連に関する問題(17問)

2 《歴史》飛鳥時代から戦後に関する総合問題(22問)

3 《公民》バブル崩壊、平成時代に関する総合問題(16問)

2020年度の修道中学入試は、昨年度に比べ難化しました。大問3つ構成は変わらず、問題数は55問でした。その内訳は、記号選択(34問)・語句記述(15問)・文章記述(6問)となっています。記号選択問題が昨年の20問から34問と大幅に増加しました。地歴と公民の問題の出題比率はおおよそ7:3の割合で出題されています。

1は修道中学の学習プログラムである「FLP」での発表原稿を題材に、地理分野が出題されました。統計表を使った問題が数多く出題されましたが、修道中学ではおなじみのものです。統計表を使った問題は、落ち着いて知識を確認し、あてはめていけば正解を導けるようになっています。例えば、②の問題については、面積割合75%から国土面積の約

4分の3は山地であること、人口は低地に集中していることからEが低地・Fが山地であるウが正解となります。ただし、受験生になじみの薄い項目から判断しなければいけなかった④・⑩の問題は難しかったのではないのでしょうか。

②は2019年にあったできごとについての会話文から歴史分野の出題でした。「元号」を題材にした出題は解答がしやすかったはずです。ただし、問3・問12のように、単に年号の語呂合わせ・歴代内閣総理大臣の名前を覚えているだけでは解答できず、できごとの中身も理解しておかないといけませんでした。また、「浅野氏の広島城入城400年」に関連する問題が2問出題されました。記述問題は1964年に開催された東京オリンピックに関して、そのときもたらされた良い影響・悪い影響について、それぞれ自分の考えを説明させる問題が出題されました。

③は平成時代に関する文章を読んで答える公民分野の出題でした。問1(1)リーマン、(2)地下鉄、(6)入管[法]の語句補充は難易度が高かったです。またバブル崩壊に関しては、深く掘り下げての内容を問われ、さらに具体的に分かりやすく説明をするように求められました。また問4④の記述問題は、文章読解をした上で「平成が平らかに成った時

代とはいえないとされる」点を説明しなければならず、短い時間で文章を要約する力が問われました。

今年の修道中学入試合格のカギは、次の2点でした。

まず、統計表を使った問題の対策は、常にプラスアルファを意識して知識の定着をはかることです。例えば、県名と県庁所在地名をセットでただ覚えるだけでなく、地図帳での位置、加えて盛んな産業、工業都市、河川や山脈といった地形、気候や隣接する県などです。単独で暗記をするよりも、関連付けて一緒にポイントを押さえることで定着率が格段に上がります。すると統計表をみた時に、数値や項目をみて関連する情報が頭に浮かんでくるようになります。

また、記述問題もいわゆる語句説明の問題ではなく、内容を理解しているかを試す問題が増えています。オーストラリアからのインバウンドが1月に多い理由、明治時代以降に天皇の在位中に元号が変わることがなくなった理由、東京オリンピック開催の良い影響と悪い影響について自分の考えを述べる、バブル崩壊についての具体的な説明などです。普段のニュースをただ見るのではなく、「自分ならどうするか？」を考えながら興味を持ってとり入れていくことが求められています。